



改補
心
依
社
家
時
記
彙
考
附
錄
五

^ 5
678
5





雜之卷目錄

賦物之事

一葉

和漢の事

一葉

百韻の式

一葉

百韻の式

一葉

米字の式

一葉

七十一候の式

一葉

易の式

一葉

源氏の式

一葉

五十韻の式

一葉

四十四の式

一葉

歌仙の式

一葉

長哥行の式

一葉

短歌行の式

一葉

十八公の式

一葉

首尾の式

一葉

表合の式

一葉

雜目

利
門 678
號
卷 5

明治三十七年十一月五日
坪内祐藏氏寄贈



發句の事 ニ 脇句の事 ニ
 第三の事 ハ 四句目の事 ハ
 月花定座 ハ 去嫌大意 ハ
 句數並去嫌 ハ 季節の跨物 ハ
 嫌古式八ヶ條 ハ 指合の事 ハ
 正花の事 ハ 戀の詞 ハ
 切字の事 ハ 発句の格 ハ
 押字の格 ハ 抱字の格 ハ

増補俳諧感時記拜草 雑之部 曲亭主人纂輔 藍亭青藍増補

卷之貳 賦物

から、能言まで賦まる連哥をいへ、端作りとも俳諧之連哥と
 書ききく、○蕉門や賦物の沙汰あり、さんど心得の
 小大略と記す、もあひ草 賦物の文字、且小立字八面之嫌、
 賦し物の文字、さまりくる文字とをあらわん、五箇ふ
 どり、事ゆれ、発句小まごかい、真ある文字とをいへ、
 たと、山櫻の発句、小犬とさる、さる、さる、山ふも、さる、
 故、蜂、さる、さる、さる、餘、さる、小准、一字露頭
 二字、返音以下百韻の俳諧、さる、さる、さる、さる、さる、

賦何衣連哥
 年毎ふみまどと、花ハ櫻、さる、
 賦何袋俳諧
 あれ、さる、さる、何、さる、世々の春

え、ハ、上、賦、さる、さる、端、作り、の、何、さる、さる、さる、さる、
 の、さる、さる、物、さる、さる、句、中、の、春、さる、さる、さる、さる、さる、

春袋と取らるる物あり始の句ハ花衣と取らるる

様 何

天の川水若くしりり〜とつね

是ハ様若と取らるる余ハ准へとるべし

一字露頭

あぢう〜と寝ぬの浮世の杜宇

是ハ句中の寝と音ハ取らるる〜

二字交音

龍で飼らるるも高し時鳥

是ハ句中のきもと〜と杉と聞あま〜

三字中畧

去る来る羊のあゆ〜や魚千里

是ハあゆ〜と〜字の中と畧して綱と取らるる〜

三字上畧

蝶鳥やちりり〜とまゝる花鳥

是ハ〜と〜の上と畧して丸と取らるる〜

三字下畧

月ハひとの影ハ目数のあぢう〜

是ハひとつのつ文字と畧して人と取らるる〜此外四字上

下畧あ〜ハ難波津と上下畧せ〜庭とあるやりの事又

五文字中三字畧あ〜と〜と〜と〜と〜と中三字畧せ

瓜とあると〜ハ又一字借とらるる白雪ハ山の額ハ比擬

の〜と〜ハ句中のけともと聞せ〜とあ〜

二字除篇

龍門ありて都へのり〜と鱈の魚

是ハ鱈といふ字の魚篇と取て、雪とは立〜

他 添

鶯やよび哥毎ふもね題目

是ハ毎の字ハ篇と添て、梅と〜とあ〜

和漢之事

大々俳諧の法と守〜し和漢ともふ
五句と以て限りとも但し漢の對ふ至り

六句ハ可及事景物草木亦貞教和漢ハ通用〜し

百韻ハ一の物ハ和の〜より出〜ハ漢ハ〜ハ異名〜

用〜ともあ〜ハ二句の物ハ〜ハ万葉の書分ハ

用〜〜と和漢ハ〜と漢ハ〜ハ漢和ハ〜ハ和の

奉句〜和漢ハ漢ハ韻字と用〜ハ漢和ハ漢ハ和ハ韻

表六句目月裏六句目花〇支考云首尾の吟ハ一座の時
宜あり或ハ奉納の諸願と祝し或ハ歲暮歳旦の賀し
始終まことのやる意ありさうハ六々とも八々とも

表と裏の首尾と合せて月花二座模様なり

八句目月西華集支考凡例ニ云此表ハ神祇あり教教
あり意無常とえらまひ名所との人の名とのハ二卷の
始終とてふつひる心あり

湖東問答去来云去秋考
爰ハ旅寐して卯七と表合あり我ハ語て曰ん表合ホの
非諾ハ尋常の式と替るべし表の内ハ一巻の姿とて
去来をもまのちふ用やまき事ふりとのへり一段

面白くして答ぬニ子
諸抄云一座の巻頭
發句

ふれハ宗匠責人老
人の外ありて句の体伸くと和ら詞もさうふ
いとつらむべし云切字の道理ハ切字の条ハ注を

發句の時節と違へまとの餘情とのへりべし
發句神叙意無常時宜述懐あれハ發句も同

脇句
一一との何らいあふし發句雜多ハ脇も雜多諸抄
云韻とてふして留る事ありあもあらんと切者の業

あはれ初心のよるよふあらしと云いませうとの
あてこの故と明らむ昔は監校なるハ脇ハ哥の下の句ふ
して上の姿とつけ結ぶを正格とす但し發句限ら
意と結ぶと未練なりしてあては留る時ハ意残りて
脇句の体と失ふものハ初心のものをとらわらむといふ
むたこの故とあらむ支字して留る時ハ太りこ
意切て脇句の体と失はざば字留よりうとてらるる
べしとてふして留る例とらるる續虚栗たび入と我名
よそれハ初時雨芭蕉又山茶花と病をよと由之冬
の目霜月や鶴のやむらびあはく荷兮冬の朝日は哀
ありたり芭蕉曠野つらくの名もじつとら
春の草荷兮打まて蝶の夢とらるる芭蕉
諸抄云丈高く脇句ハ轉るととよとて句がらひめ
ハオ三の本意ハわらむ第三ハて留ハ留ハ留のさふ
ふてまてこれゆとの故と明らむ昔は監校なるハ
發句の次ハ轉せしめんとあ意と残りて下句ハ及ん
とオ三の格とらるる其故とらるる
あて下と結ぶとさハ太りこ意残りてオ三の体と失は

第三

故てふ人の留めてまうと云ふ但し此の字は

れどもオ三の格はと云ふより定めておておのめりし

を意を残して下句ふ及むと云ふ又の目

いふ道理と云ふゆへに句作の意ふまうと云ふ

花蘇馬骨の霜小咲く社園同上三種槍山家の体

と木の葉降 芭蕉朝顔の巻オ井落まうふ月

出ふなり 芭蕉猿蓑オ雲雀鳴小田上カメのあれや

珍預定まうておとあとの作例如此中も月出

ふなりと云ふれりし海の句ハ登句ふ似

との意の切ぬと云ふ三の体と云ふ准へまう

諸抄三云ありたりしものゆへに留めてまう

かやと云ふ三云まも其故と明と云ふ青藍按の意

と残し四句目ふ及むと云ふオ三の体の意と云け結

ぶと四句目の格と云ふ故に作意と求めまう

去來云花小定座あ先師色給ハ當流ま

月花定座の心得

まこと用ふ花と引上るふ二品あり一ハ二座ふ貴翫と云き人ありて其人小花と望むとき其人の句前小まう春

季子と出ると花と望むより是と呼出ると花とのふと

つ貴人功者の人他ふ譲と云ふ人ありしと云ふ呼出しと

待む花と作る又雨吟の時互ふ二木つもの句ぬふれば

辞退ふ及むを引上て作るハ故りて呼出ると

呼出ると者の過りて花ぬの罰あり下巻の青藍

云月花ハ二巻の筋ありて定めて座ありふありハ附

合の辞義はわづりて後れり時貴翫の月花と折端

ハいさばと云ふ故折端前の高句とて定座と云ふ例其

故と知るべきハ月花の座と云ふありしと云ふ二巻の變化

ハ自在あり但し月ハ折端へらむる例ありハ前

月の障りて止事と得られ

あり花ハ例と云ふ

嫌ハ天象地形より草木鳥獸も器財食服と目

みまう耳ふハ見と云ふ遠慮あり

よと人の制せと云ふ我と用捨と云ふ

是と我門ハ一理万通と云ふ柳俳諧の式ハ楚山の無

言れふ濫觴と貞徳の御傘ふハ連哥の家ふハ應安の新式と鑄形ハ

去嫌大意

貴草式三云去嫌ハ天象地形より草木鳥獸も器財食服と目みまう耳ふ見と云ふ遠慮ありよと人の制せと云ふ我と用捨と云ふ是と我門ハ一理万通と云ふ柳俳諧の式ハ楚山の無言れふ濫觴と貞徳の御傘ふ連哥の家ふ應安の新式と鑄形

例ふ姿情の行ちひありもくは袖めりふ河遠き
 不遠り三六空雲雲雲雲のこくひ二句去の式あり
 ごとく兼門一流の姿のこくひ誰々二句あて附へらん
 古式は牡丹二座一句の物故不律は廿日草深見神ホの
 異名よそ今ひのあつてとらやてひもて音と訓り
 かいりとも同じ一座の百韻は同じ物の二ツ出さらん
 實作者の不機轉とふアしといひ牡丹のけりも
 踏皮の牡丹といひ或は牡丹餅といひまき植物の牡丹
 ありされ折と去面とくく五句も三句もまづ一是
 ホと異名といひ異体といひ古式今式の差別餘は准て
 ちとて一は世に流布の能式八却今より
 姿情の行ちひありもくは袖めりふ河遠き
 式とあつて貞字式といふる也

句数并去嫌

表八句不嫌ふ物

神歌意無常迷懐懐旧名
 所同字病体人名不嫌ふべし
 と諸抄ふとそり人音益云病体人名不嫌ふといふる也
 初懐紙才雪村か抑ふ行掉とと冬の日月影
 小利休の家と鼻ふのけ句塞才西行が軍法なり小
 夜ふけて三の作例あり様むるふ風雅不富る古人の名

表の...
 権兵衛八兵衛の...
 曠野目 填註つ
 の病体あり...
 源氏物語
 用此

春秋
 三句より五句までつく二句まで捨む春秋は
 景物多しとあり○春と春秋と秋五句去
 夏冬
 一句より三句までつく三句より多しは夏
 冬の景物少しとあり○夏と夏冬と冬五

神祇
 一句あてはるる三句より多し
 せすの神祇と神祇三句あてはるる
 神祇ふ迷懐無常
 一句あてはるるか
 同じ迷懐無常

山類
 二句より五句までつく二句まで捨む
 ○忠と志三句去今昔去は後人の
 一句あてはるる三句と
 水邊
 山類
 人倫
 三句去あり

山雀、日雀、四十雀

この類ハ秋のくくふ耳也
もれハ鳥也

駒鳥

春ふれど度るのふ
て秋も用ふる也

鯉

秋の二字と断らむ
掛也

野游

春ハ摘菜の遊ひより
秋ハ草狩の具ありて決て春秋の二季

鶉

鶉毎ハ桃の節供ふらりて菊の節
供ふ終る也

節供

何の節供と断らむ
何の節供と断らむ

鮎

鮎ハ上下の字と断らむ
鮎ハ上下の字と断らむ

祭

四季の物ハ祭と鷹の類と断らむ
四季の物ハ祭と鷹の類と断らむ

鷹

鷹ハ四季の名目として四季の差別と断らむ
鷹ハ四季の名目として四季の差別と断らむ

非諧ハ多用あれ其名目と断らむ及んば其句
の季ふつよて決て四季ふ用ふべし

古法可有取捨事

杜鵑 深見草

柳 櫻 鶯 螢 杜若 芭蕉 蝸

牛 鶉 鶉

此十品ハ象物の數量あり古抄ハ此
類と音訓ハ替異名ハ呼でハ三ツと

四ツとも免れんと今ハ俳諧の式目ハ一
座ハ只一と定めらる古今の取捨とハ此謂あり

凡例とあせらる

去嫌可有斟酌事

父母 男女

此四品ハ人倫の九例あり

主 誰 身 獨 媒

此五品ハ人倫の噂あり人倫と
定て指合とらるる也

僧 寺

此二品ハ古式
ハ人倫ハ非也

附へしとぞ打越と嫌ふ
こころ古今の通式あり

指合可有分別事 △あそとゆり △

頃とゆり △ふとゆり △てとゆり 此四品ハ

古式ハ大事とあれど △老 △親子 此二品古式ハ

今式ハ子細あり △鳴子 △網 △花鳥の繪 △花 ハ迷懐と成せり

今式ハ分別 △小櫻 △楓 △紅葉 古式ハ鳴子ハ縮と守る故ハ

植物ハ二句去と名いふ意

のこびふふささハ分別ハ及ぶとて生類ハ二句去へ

ハ細ハ魚鳥と二句去の例あり或ハ草木鳥獸の絵ハ

其季ノと持あふ生類植物ハ嫌むとやとて

雑とあまハ論あらん季と持二句つて去べきもこれら

ハ絵の月喻の花の例あり凡雅の賞翫とあせり花のみ

ちの二品と櫻と花ハ面とゆりて軽く楓と紅葉ハ折と

嫌ひて重し何とて二品の差別あるも花ハ三春の艶とい

ひ紅葉ハ三秋の色とゆひて櫻と楓ハ其体あり花と紅

葉ハ其用ありこの故ハ花ハ櫻ふあふと櫻ふあふと

中あわむとハ我門の正花論あるとや爰ハ論せし櫻

も楓と花と紅葉ハ面とゆりて只一ツ

ありとや異体ハ例の数ととてめむ

千句有一物之事 △鬼 △虎 △龍 △

女 此四品ハ連俳の差別あり新式の一座一句の

所ハ凡五十余名われども多くハ連寄の用

花鳥有二物之事 △柳 △櫻 △鷹

△燕 △鶯 △菊 △千鳥 此七品ハ古式より

一座一句の物あり

とて花鳥の二品ハ四花八月の賞翫ふ致ひと一

座ハ二句つて有べきとあり花鳥の名ハ代ふ考へし

△冬牡丹 △冬椿 △冬梅 △紅梅 △

緋桃 △梅櫻の紅葉 △山吹 △郭公

此六品ハ花鳥の中を只一句を二句にわけて三品物
の凡例あり此段の詮用ハ二句ありき異体ハ只一句を
二句あるも同じ同体ハ二句ある
二句一意の用をもちて三品あり

日用可輕物之事 △昔 △曉 △庭

△垣 △袖 △襟 △湯 △汁 △文 △使

此十品ハ古式ハ一う二うとわん
ど折とのけ替てハ四もあつて
△照 △曇 △泣

△笑 △植 △荇 △眠 △覺 △起 △居

此六品ハ支体の躰多しと詩
品ハ日用ハ多用ありハ面と替
てハ七もハ八もあつて

△目 △鼻 △耳

△口 △手 △足
此六品ハ支体の躰多しと詩
の用多けしと折と替て四も

有り

尤可不審旋之事 △老 △福神 △

親子
元中古の式目と論むる第一連非の用と
不用とをさしこまへを連奇ハ艶詞のあつと

学び才ニ意の理窟とをいへて滑稽言ハ談笑の如
とをさしこまへ今ハ非諧の扱ひハ云元ハあつた
事ありをれが中も不審をへさゆは老ハ述懐を
表ハ句ハ樂へハ福の神ハ種もさしこまへハ彼の理
窟ふらふと命の字とをいへ述懐とあり親子と
つげと述懐とありこれハ何故か君のあり

稻妻 △電光 △烏鵲の橋 △龍 △民

の龍
古式ハ稻妻電光と天象ハ樂とをいへ鳥
鵲の橋と生類ハありとを龍と生類ハ樂

むすとも民の電ハ居方ふわらざるといふことハ不審
のまふ用ふべき也祖ハ今式の道理ふまふ世に嫌之
也
△青柳 △菘 △櫻人
古式ハ青柳詠ハ
春にして植物のわら

むすとも「菘詠ハ秋の物もあつて冬類もあつて冬もあつて
櫻人詠ハ春の季と持て植物ハ三句より入倫も二
句より入り向三品の詠物ハ三色のものありあつてことごと
三別の道理ありとも道ハ一貫の日ありらん今式より
去嫌ハ一

△泪の露 △泪の雨 △青楓 △
例とらん

押鳥 泪の露ハ降物ありて泪の雨ハ降物もあつ
てことごと御今の細数も不審あり青楓と

秋の姿ハわらざりて楓ハあつて紅葉の体ありて若楓の
下とことごと若楓ハ夏あつてついで青楓もあつてついで
雨所ハ雨注のちひあつてついで不審の不審とや
いふん押鳥と雜とついで掠鳥ハ勿論もて菱喰り豆
もことごとの実と好むる名ありんば論も秋とついで

曾不及論物之事 △雪小霰 △椿

小花 △蓮小實 御今ハ雪ハ霰ハ附句と嫌ハ
む椿ハ雜あり非化と結びて之

春あつて蓮の実ハ夏あつて蓮ハ花ともハ実を結ぶ
物ありといふことごと今式ハ曾て論あり

右古式とむかひ蕉門一派の確論もつて蕉翁の
授記と貞享式ハ載りて爰ハ其大畧に記ま
のこ本書ハ委々議論あれバ往てついでついでこの
外の去嫌ハ御今 苧環 通俗志 等ハついで
畧

指合 貞享式と合とついでついでこの同字と
そとついでついでついでついでついでついでついで

き耳ふりらぬの表あり數字ハ送字も旧式ハ輕
ことごと一盃ハ山ハついでついでついでついでついで
ついでついでついでついでついでついでついでついで
万通と以て准へ知るべし但し初心のついでついでついで古

雜

式おのげらる。 **四** いづく ニツ〇折と替へし

と左ふ抄出ス。 物とてあふあふあふあふあふ **いづ**の 一ツの物

とひひうらうら二句去あり。 まぶ **いづせん** 一ツ〇上の五文字ふやく字あり、
いづせん留るふやく字あり以上

ニツの内今一ツ の内よめるが **い**ふ **い**ふ 三ツ **は** いな

し 上ツ下ツ下ツれまを今 **む**らう 七ツ去 **む**

とむ 濁音ニ **小** 夕去 **と** 上ツの小留ハ三ツ
去下ツのふ

一座一ツの物とを且あふひありとより青藍持ま
ふ上ツの意とつけ結ぶと下ツの格とをさうとさうらひ
ふくふらふ一ふらふれど意残りて下ツ

の格とあふむ故とあふひありといふ **小** 前小限

よ めふといふ詞き **あ** 折合も

句去 **ぬ** **ぬ** **と** **ぬ** とんぬとをんぬの二句去
あり、とんぬとふのぬのき

但し折合 とま **ぬ** **と** **ぬ** 二句
去 **ぬ** **ら** **ん** **と** **ぬ** 二句去あり

ん 七句去ありぬらんとま
三句もま **る** 二句去あり

る 音藍云紐鏡より五段の
るるとた段のつる又ハ五段

ふひあり **る** **と** **ゆ** 青藍云紐鏡より五段の
るるとた段のつる又ハ五段

と打越るもさうらとさうら **炭俵** 前妹と

うら貫えり 付 **僧** 都のわんまづ文とゆ **又** **打** **越**

ふ嫌とぬ例ハ同巻ふ終夜尼の持病と押 **ら** **ん**

敷てらる この外作例わ **ら** **ん** 二句去あり残

ら **か** **か** **ね** **字** 俗ハ送字とい
ふむらう

ふく送字の句ふ送字の句と附ると二折ふ一ヶ所

契ちぎり 二世の契ちぎりの末、契、伊達、身み、

獨寢、人目ひとめ、目め、神祈かみかき、

憂別うれい、人、色いろ、色いろ、

名な、名な、名な、名な、名な、

心こころ、待まち、待まち、待まち、

十寸鏡じゅうすんきょう、占うらな、占うらな、

姿見鏡すがたみきょう、占うらな、灰占はいうらな、夕卦ゆふが、

坊主おとし、哥比丘尼かひしうに、

二云ふたごころ、伊勢熊野いせくまの、

此丘尼こけに、名な、其中そのうち、小声こゑ、

て、て、て、て、て、て、

わ、わ、わ、わ、わ、わ、

も、も、も、も、も、も、

ち、ち、ち、ち、ち、ち、

二心ふたこころ、水みづ、水みづ、

蓮れん、蓮れん、蓮れん、

懸心けんしん、想そう、文ぶん、賣ばい、

常陸とちぎ、常陸とちぎ、常陸とちぎ、

雜喉ざご、喉のど、喉のど、

き、子こ、子こ、子こ、

仇あだ、仇あだ、仇あだ、

してだづひく恨らう恨ら
垣間見 物のひまより

虫の印 守宮の血と女の

時 一期消うせどひ 春心と動うせ忍

龍子と名く守宮の名ハ秦の始皇帝宮人の私

ふ守宮の名 轉合中戀 中少て取らう

薄中心中、やりの、惚ら

惚ら心、後よび 後妻と うそわらう

和名抄後妻、 うそあり打らふ

和名中波余利、 後妻と離別して

後妻とむらふふそのまうふよりく、前の妻とこ

しと女とむらふふ其の日某の時うらあり打ら

ゆくごさよりとりのあり、某の日ふ至れ、前妻とえに

めくごさよりとりのあり、某の日ふ至れ、前妻とえに

わらて後の妻のく、行臺所より合して打まらう

後の妻のく、行臺所より合して打まらう

しと用意をさして、前妻後妻

の媒せりの妻と待女郎よりしと、双方の中ふ

事ハせざりしと、古くよりあり、事あり、玉海集、白浅

縁元龜のころまて色有、 とやうかき

ぬく 曉起 着る心より意の別と衣々とりふやせ

下紐、身とあつて、措切、髪切、股

突、尻目づらひ、思ひさま

雑

羊未深く

ありその木ハ一尺をりみして五色小彩りてこの

ゆらふ錦木詞花集ゆらふゆらふと初

錦木の千束あしてゆらゆらゆ

がぬ巨房外古奇なり、**哲賢、起請**

男女ひふ神文 **かてぬる香** 女のみにていそ

香のわづら重 **肉陣** 肉屏 **天室遺事** 揚國

ありく脱と 忠久、月常、小婢、妾

の肥大ゆる者と前み行列て風と遮りび蓋後

人の氣と藉て相暖む故ふらまと肉陣との

宮 禁闕中美人 **美人の名、美人と畫**

の在所 **漢書** 王牆字ハ昭君漢の元帝の官人也云 **西京**

雜記 元帝後宮既多し常小見るとを得と乃ナ

画工とて形と畫せらら畫と案してること幸と

諸官人皆画工を賂を巧王昭肯を遂小見ること

えを白奴朝入て美人と求ら關氏ふせんを愛ふ

於て上面と案して昭君と以て行うひ去ふ及んで

召て貌をとらふ後官才と帝をと悔む心

籍已不定る帝信と外國小重ん故ふまく人を

更も乃其事と窮案して画工と市ふ

棄つ云漢書琴操水の説述小異心 **返** **覓**

香 李夫人ハ李延年の妹武帝の夫人あり返魂

香のここ世人のあるとらふを思ふを

空 薰物留留羅袖の移つ香

ふせ籠 枕香 灰うり香 **化** **粧**

紅 **粉** **白** **粉** **丸** **紅** **的** **黛** 眉 **掃** 鐵 **掃**

匂 **袋** **不** **二** **額** **丸** **額** **密** **男**

妹 **許** **ゆ** **く** **紅** **絹** 百陀羅尼 **香** **の**

るぬとらる香匂ふ春の朝日ふ紅絹の水をりら今

支考が腹ありらん恋匂ふを匂体ふもあるを

夫せふ東國の方言 **夫** **婦** ひふつまと称せり

きつぬ、きつぬ、思ひぬ、おむひぬ、つつハ大く

とるひと付りぬ、ぬ、切るるあり、タゾとのみ

里語ふあふり、**猿蓑**ひぬ、**下知の詞**見よ、

と人おむるらとくの暮路通、**疑ひのかし**、

まていけ、もど人小下知ま、**か**切るるあり、**ゆ**

如くまるとり、皆切るるあり、**聞ゆる**、見ゆる、あてり、**よ**、**下知**ふらざるよ、

べきと聞ひ、見ひと切、**猿蓑**鴨のむる野

中の杭よ、**奥の細道**蛤の二見へつるをゆく

十月嵐雪、**そ**、**秋**を芭蕉、**炭俵**八巻をとまを

若衆を大根引、**ど**、**寒**なほどふり寝る夜を

野城此類のぞ、**ど**、**のり**き、**芭蕉**、**猿蓑**志

ぬんこの藪ゆく風をあつりし、**野童**この類のぞ

ハ疑のやの糸ふりつる詞を、**結む**られ、**詰格**とのば

お何と、**み**ハ勿の意あり、**盃**ふ

おけてねへめれ或ハ、**つ**の**結び**詞のあつた

詰格とのぞ、**白魚**小價あるこそ恨まぬ、**芭蕉**

どづらんを餅をこころね挑の花今〇又一例

猿蓑初とくまも追々ふ咲むこそ、**利空**、**な**

ん、**あゆ**ひ抄世お願ひのふんとつひつけられ唯ぞ

と詠つる詞あり、**あ**をあらまんとつる詞と

おのぞ、**ん**、**同上**、**今**より後とそり、**らん**

し、**同上**、**其**心のむも、**らん**、**らん**

とるひと付りぬ、ぬ、切るるあり、タゾとのみ

里語ふあふり、**猿蓑**ひぬ、**下知の詞**見よ、

と人おむるらとくの暮路通、**疑ひのかし**、

まていけ、もど人小下知ま、**か**切るるあり、**ゆ**

如くまるとり、皆切るるあり、**聞ゆる**、見ゆる、あてり、**よ**、**下知**ふらざるよ、

べきと聞ひ、見ひと切、**猿蓑**鴨のむる野

中の杭よ、**奥の細道**蛤の二見へつるをゆく

十月嵐雪、**そ**、**秋**を芭蕉、**炭俵**八巻をとまを

若衆を大根引、**ど**、**寒**なほどふり寝る夜を

野城此類のぞ、**ど**、**のり**き、**芭蕉**、**猿蓑**志

ぬんこの藪ゆく風をあつりし、**野童**この類のぞ

ハ疑のやの糸ふりつる詞を、**結む**られ、**詰格**とのば

お何と、**み**ハ勿の意あり、**盃**ふ

おけてねへめれ或ハ、**つ**の**結び**詞のあつた

詰格とのぞ、**白魚**小價あるこそ恨まぬ、**芭蕉**

どづらんを餅をこころね挑の花今〇又一例

猿蓑初とくまも追々ふ咲むこそ、**利空**、**な**

ん、**あゆ**ひ抄世お願ひのふんとつひつけられ唯ぞ

と詠つる詞あり、**あ**をあらまんとつる詞と

おのぞ、**ん**、**同上**、**今**より後とそり、**らん**

し、**同上**、**其**心のむも、**らん**、**らん**

雑

あゆひ抄世の中ふさきて櫻のあつりせむ

春のこころいのかけのらま、と里言を

てり、蕉門の俳諧ハ俗談平話と専門とをいふ、

とらる詞いと稀あり、**続虚栗**、**附**思ふわ物笑ハ、

花の隅、**ま**、**行**ま、**め**つ

其角、**り**んとま、と切るる

わめひ抄 その大いひとあしそりてつらひ心あり

里言のオモキチヤヤウスデヤあてのふは似てう 古今

あつて川をみちりてなれてあがる あめひ抄

ゆりつららふ錦中もさそあひ な と人ふりつらる

詞あり思ひあもまうていひこころあもゆふあ を

く 曠野 二日ゆめゆめつらせよ花の春 芭蕉

炭俵 いそぎき春と雀のうさ あめひ抄

袴酒堂 この類のと切 あめひ抄

あふふくありてよきこちてあつ なりて

とそりてあてりい詞あり あめひ抄

まね あめひ抄

詞あり あめひ抄

あめひ抄 あつらるる心のつらふ 同上

こりてあて人とうごのそそり 言ふ

ノとつらふ心とつらふと落着 詞あり

ふつらふ心とつらふと春 詞あり

ふ あめひ抄

ふ あめひ抄

ふ あめひ抄

同じ類の詞もあつてもとの落着 か

と決定し や

自然と や

古今 春の夜の闇 あ

は香や あ

と心 あ

いふ あ

何 あ

誰 あ

不動言の切 あ

青藍云切字 あ

の過 あ

暮 あ

と あ

先哲の作例 あ

の如し あ

神祇の格

尊さふれゆ 合ぬ御遷官 芭蕉
猶さふれ花ふ明ゆ 神の顔

釈教の格

涅槃会や数手合まる数珠の音、
灌仏の日ふ生れり鹿の子うね

戀の格

紅梅やしら恋つくる五簾、

無常の格

やうと死ぬるきこえは蟬の声、
鬼祭りの焼場のうなりうね

追善の格

秋凡ふされてうねき柔の枝、
當歸より哀の塚の萱草

述懐の格

ふるさとや脍の緒ふくる年の暮、
父母のまきうふこひ雉の声

羈旅の格

ひらう脱てうらふおぬ更衣、
年くれぬ登きて草鞋をばあら

餞別の格

鮎の子の白奥送別うね、
此心推せよ花ふ五器一具

名所の格

五月雨ふくれぬ物や瀬田の橋、
松島や千々ふこころ夏の海

即興の格

景清も花見の座ふハ七兵衛、
ひうきけ秩父のうねく角力取

昼晷の格

襟ゆふと手ふをさむ額髪、
降まると竹植の日ハ暮と笠

昼讚の格

山吹や宇治の焙炉の白ふ時、
りるじの俳諧とくんぬる胡蝶

晷字の格

奈良七重七堂伽藍ハ重櫻、
昼顔ふひらぬせうりの床の山

時宜の格

梅白しきの名雀とぬけまけ、
やうり木子猶やう木や梅の花

時宜とハ其時ふ照し其人ハ對して情と述るといふ
前の一章ハ野さらしの紀行ハ三井秋風ハ山家と訪

ふといハ端書ありくあうと林和靖よ比くあう
時宜あり後の一章ハ曠野集ふ出て細代民部ハ息

みあひてといふ端書あり句意ハ笈日記ふこれハ
其父弘氏の主此道の凡雅ふ名ある故ふべし云い

賀の格

先祝へ梅と心の冬こりり、

雑の格

うらふが杖突坂と落馬哉、
あきとくこふ誰松島とくこ心

雑

貞享式 今按てその名所は雜の雑句といふ句ふ其
所の名と出し其風景の情とていふてまて當季
とむきふんをむき情ハ
ふふふふふふふふふふふ

押字 何の本の花ともあつて白ひれ

上ノ何とていふ下ふふとい結びてのてを
何とていふ上ノ何と押さふて

抱字 夕顔や秋にいろくの飄る

上やとあり下ふふとい結びてのてを
と秋のハ文字とて上のやわいと抱る

増補歳時記葉草雜之部終

益字のよき葉草

俗稱 益字

嘉永四年辛亥十月發行

大坂書林

ふ高橋筋南まて目

敷原屋九左衛

ふ高橋筋南まて目

河内屋吉之助

同 産物所

河内屋吉之助

同 安土所

河内屋和助

